

佐藤春夫の翻訳方法の一考察  
—— 魯迅著「故郷」について ——

SATO Haruo's Translation Method on LU Xun's 'The Native Country'

曲 嵐  
QU, Lan

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第48号 2019年12月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.48 2019

## 佐藤春夫の翻訳方法の一考察 ——魯迅著「故郷」について——

曲 嵐\*

### 1. はじめに

『魯迅全集』巻1 (人民文学出版社 2005) の「故郷注釈」によると、「故郷」は魯迅が1920年8月に書いたもので、1921年10月、雑誌『新青年』の第9巻第1号に発表された。二年後の1923年8月に、北京新潮社より小説集『呐喊』に収められて出版された。

「故郷」が初めて日本語に翻訳されたのは、1927年 (昭和2年) 10月、武者小路実篤が編集する『大調和』第1巻第7号に掲載された訳文である。この訳文には訳者の名前が記載されていないため、訳者については身元や背景も未詳である。以下、「訳者不明訳」と称する。

1932年 (昭和7年) 1月1日発行の『中央公論 新年特輯號』の創作欄に、佐藤春夫による「故郷」の訳文が掲載されている。これは日本における「故郷」の二番目の訳文である。この翻訳について、丸山昇 (1986) が「第一線の作家として地位を確立していた佐藤春夫によって、代表的総合雑誌『中央公論』に翻訳されたことの持った意味は大きかった。それ以後、魯迅の名は、ようやく日本の文化界に知られるようになった」と評価している。以下、「佐藤訳」と称する。

佐藤春夫の作品には、中国の漢詩の訳詩、中国古典を取材した小説、中国の古典と現代の文学作品の翻訳・翻案がある。具体的には、佐藤の中国文学からの翻訳は1919年の「孟沂の話」<sup>1</sup>から始まった。中国の漢詩の訳詩集『車塵集：支那歴朝名媛詩鈔』 (1929 武蔵野書院)、『玉笛譜：支那詩選』 (1948 東京出版)、中国古典を取材した小説『李太白』 (1918)<sup>2</sup>、「星」 (1921)<sup>3</sup>、中国の古典の翻訳・翻案集『支那短編集玉簪花』 (1923)<sup>4</sup>などがある。1931年以前、彼の作品は『今古奇観』<sup>5</sup>のような白話文、また『聊齋志異』のような中国古文を日本語へ翻訳したものが多かった。須田千里 (1998)

\* 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程。arashi@yeah.net

<sup>1</sup> 「孟沂の話」初出は1919年7月1日『解放』 (第2号)「創作」欄に掲載した (須田千里 (1998)「解題」による)。

<sup>2</sup> 「李太白」初出は1918年7月1日発行の『中央公論』 (第33年第7号)に掲載、副題は「A fairy tale」である (須田千里 (1998)「解題」による)。

<sup>3</sup> 「星」初出は1921年1月1日『改造』 (第3巻第1号)に「黄五娘」の標題で「第十二折」にあたる部分までを掲載、さらに同年3月1日発行の同誌 (第3巻第1号)に「黄五娘」との重複部分を含めて「第一齣」から最終の「第五十四齣」までを「星」の標題で掲載 (「第十二齣」の末尾に「以上訂正再録」と付記がある)した (須田千里 (1998)「解題」による)。

<sup>4</sup> 『支那短編集玉簪花』初版は1923年8月5日新潮社により出版され、1919年から1923年までの短編作品11編を収録している (須田千里 (1998)「解題」による)。

<sup>5</sup> 『今古奇観』は、抱甕老人が三言二拍から四十篇の白話短篇小説を訂定して刊行した選本である (『中国大書典 初版』による)。

の「解題」によると、1919年の「孟沂の話」から1929年の「平妖伝」まで、佐藤春夫は計29編の中国の小説を日本語に翻訳した。その中で「故郷」は、佐藤春夫の現代中国語から日本語への翻訳の第一作であることが注目される。

本稿は佐藤春夫訳の「故郷」の成立において、使用した文献を明らかにし、彼の翻訳過程を明確にする。この作業は佐藤春夫の上述の翻訳・翻案の特徴や意義を明らかにするためである。

## 2. 『大調和』の訳文と訳者について

前節で述べたように、「故郷」の最初の邦訳は、1927年（昭和2年）『大調和』に掲載された訳者不明訳である。『大調和』は武者小路実篤が編輯した同人誌である。美術、文学、政治などいろいろな分野で「各自自分の研究したこと、生きたこと、考へたこと、感じたことを出来るだけ正直にかくことで他人の心にふれたい」（武者小路実篤「発刊の辞」『大調和』1927）という目的で発刊された。投稿した同人には、実篤を始め、柳宗悦、倉田百三、佐藤春夫、千家元麿、志賀直哉、菊池寛、岸田劉生、芥川竜之介などがいた。1927年（昭和2年）から1928年（昭和3年）にかけて、十三号が出て、廃刊した。

訳者不明訳を載せているのは、『大調和』の第1巻第7号の「亜細亜文化研究号」である。印度、支那、日本に代表された東洋文化について、芸術、建築、哲学、文学などの面から文章を集めたもので、日本人の文章のほかに、胡適の「菩提達摩」、郭沫若の「革命と文学」、余上沅の「中国演劇の現在及未来」、魯迅の「故郷」（小説）と唐代の李朝威の「龍女の話」（小説）を載せている。

訳者不明訳について、1927年の魯迅の日記に「故郷」を日本語に翻訳したという記載も見られないので、魯迅本人が翻訳したのではないと思われる。日本語に熟達した中国人による翻訳であろうか。この可能性を考察するには、訳者不明訳の訳語の分析をしてみるのが良いと思う。

『大調和』にある「故郷」訳文の中に、楊小母さんの話の「道台」は以下に訳されている。

- (1) 原文：『阿呀呀，妳放了道臺了，還說不闊？妳現在有三房姨太太；出門便是八擡的大轎，還說不闊？嚇，什麼都瞞不過我。』

訳者不明訳：「おやまあ、あなたはお屋敷をおうりなすつたんでせう。だのにお金もちぢやないつておつしやるんですか。あなたの三軒目の姨母さんなんぞは、門から出て行くとき八臺の大轎でしたよ、それでもお金がないつておつしやるんですか。」

『大漢和辞典』によると、「道台」は中国の官僚の古名で、地方長官をいう。清代一省内の糧儲、

<sup>6</sup> 「魯迅日記」（1927）による。

<sup>7</sup> 引用資料は、旧字体のままとし、字形の異なりは常用漢字に変換した。字体と字形については『謎の漢字由来と変遷を調べてみれば』（笹原宏之（2017）中公新書）を参考にした。

塩法、駅遞、兵備、海関又は巡守等の事務を管理し、各府縣の政務を監察す」とある。中級地方官庁の長官を通常、「道台」といった。それを「お屋敷をおうりなすつたん」と訳すのは、「台」を「お屋敷」と誤解したからだと考えられる。

魯迅本人が翻訳したならば、自分の書いた言葉の意味を間違えて翻訳することはあり得ないと思う。この誤訳から、中国人が訳したものではない可能性が高いと考えられる。訳者不明訳は日本人によって翻訳された可能性が高い。<sup>8</sup>

### 3. 佐藤訳「故郷」の翻訳の依拠原文

1956年の回想文「魯迅の「故郷」と「孤独者」を訳したころ」では、佐藤が「故郷」を翻訳した時の追憶を書いている。下線は曲による。

ただ今も明確に思ひ出せる唯一の事は、わたくしの「故郷」ははじめ英訳で読んで、それを原文と対照しながら、訳したといふ事実である。その英訳はまだ失はないで残つてゐるのを最近も見かけたやうな気がしたので、やつとそれを見つけ出して、それがGeorge RoutledgeのThe Golden Dragon Libraryのなかの一冊で、“*The Tragedy of Ah Qui*” and Other Modern Chinese Storiesといふ本でJ.B.Kyn Yn Yu といふ中国人らしい人が原文から訳したものと、別にE.H.F.Millsといふ人の仏文から訳したといふもの。中国の近代作家七人（Yo Ta Fu郁達夫の外の名はわたくしには判読できない——ローマ字になつてゐるから）さうして他の作家のものはすべて各一篇であるが魯迅のは三篇あつて、この書の大半を占めてゐる。その魯迅の三篇は初代になつてゐるAh Quiの外にわたくしの訳した*Native country*の外的一篇は*Con Y ki*で、魯迅を歐洲に紹介したら先づ要領のいい選択であらうと思ふ。書は一九三〇年の出版にかかるものをわたくしはその翌年あたり入手したらしい。わたくしが「故郷」を訳出したのはこれを読後すぐであつた。わたくしは先づ英文で一読した。中国人の英文らしくわたくしにもすらすらと読める素朴な英文でそれが故郷の内容にふさはしく効果的であつた。わたくしは早速、文求堂にかけつけて、店頭にあつた魯迅の短編集二巻を手に入れて帰り、それから英文と対照して翻したものである。…（省略）…

これによると、彼はまず“*The Tragedy of Ah Qui and Other Modern Chinese Stories*”という本で「故郷」の英訳を読んで、それから中国語の原文と対照しながら、翻訳したという。佐藤が書く「J.B.Kyn Yn Yu といふ中国人らしい人が原文から訳したものと、別にE.H.F.Millsといふ人の仏文

<sup>8</sup> 佐藤訳とほぼ同年代に井上紅梅訳の「故郷」がある。1932年改造社の『魯迅全集』（1932年11月18日発行）に掲載してある。「道台」を「おやおやお前は結構な道台さえも捨てたという話じゃないか。……」と訳している。

から訳した」の意味は不明確である。「J.B.Kyn Yn Yu」という中国人らしい人が原文から何語に訳したか。そして、「E.H.F.Millsといふ人の仏文から訳したもの」は何語であるか、「E.H.F.Mills」は仏語の訳者であるか、英語の訳者であるか。佐藤春夫の記述は松村友視（1999）の「解題」にも引用されたが、「翻訳原典は未詳」とされ、考察が進まなかった。

J.B.Kyn Yn Yuは、『魯迅全集』巻17の「人物注釈」と王家平（2005）の研究によれば、「敬隠漁」という人物のことだと考えられる。『魯迅全集』巻17の「人物注釈」に、魯迅の作品をフランス語に訳す「敬隠漁」というフランス留學生のことを紹介している。

敬隠漁 四川省遂寧人。北京大学仏文科中退。1926年に「阿Q正伝」をフランス語に訳し、ロマン・ロランに読んでもらった上に雑誌『ヨーロッパ』の1926年5月、6月号に発表した。後に「孔乙己」と「故郷」をフランス語に訳した。1929年に「阿Q正伝」と一緒に彼が編訳した『当代中国短編小説家作品選』に収めて出版した。翻訳していた間に魯迅と何度も文通した。（曲訳<sup>9</sup>）

王家平（2005）は20世紀前期欧米における魯迅の翻訳を紹介するとき、「敬隠漁」によるフランス語訳とそれに関係する英訳について以下のように述べている。訳して紹介してみる。

魯迅作品の最初のフランス語訳は敬隠漁により1926年に出されたものである。敬隠漁（1902～1931）はフランスのリヨン中法大学の中国留學生で、1926年5、6月に、彼が訳した「阿Q正伝」はフランスの大作家ロマン・ロランの紹介で、有名な雑誌『ヨーロッパ』第41号、第42号に発表された。1929年、敬隠漁は彼が訳した「阿Q正伝」と「孔乙己」、「故郷」を自ら翻訳、編纂した『当代中国短編小説家作品選』に収め、パリで出版した。その後、イギリス人E. ミルスが敬隠漁の『作品選』を英文に訳し、『阿Qの悲劇とその他の当代中国短編小説』の名で、1930年ロンドンのG.ラウドレッジから出版された。1931年、アメリカでもこの作品を出版した。（曲訳）

佐藤の回想と『魯迅全集』巻17の「人物注釈」、王家平（2005）の考察を合わせると、「敬隠漁」は「J.B.Kyn Yn Yu」であることがわかる。私の調査によれば、王家平（2005）がいうE. ミルスの本は、“*The Tragedy of Ah Qui and Other Modern Chinese Stories*”である。

“*The Tragedy of Ah Qui and Other Modern Chinese Stories*”は、1930年にLONDONのGeorge Routledge & Sonsによって出版されたものである。本の扉の次頁、目次の前に、“Translated from the Chinese by J.B KYN YN YU and from the French by E.H.F.MILLS”とある。

<sup>9</sup> 『ヨーロッパ』はロマン・ロランが1923年5月に創刊した文学雑誌である。（『西洋文学事典』ちくま学芸文庫2012）

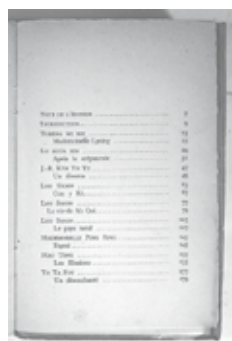
図1 “The Tragedy of Ah Qui and Other Modern Chinese Stories” 扉の次頁 (筆者蔵)<sup>10</sup>

“The Tragedy of Ah Qui and Other Modern Chinese Stories”は、『佐藤春夫記念館所蔵佐藤家旧蔵洋書目録』（財団法人佐藤春夫記念会2011）にも収録されている。叢書名“The Golden Gragon Library”、著者“LU SIUN ETC”、発行所“George Routledge & Sons”、発行年1930と記している。

佐藤の回想の本、佐藤家旧蔵の本と架蔵本と、書名、発行所、発行年、出版地、内容が一致しているので、佐藤春夫が読んだ本はこの本であると思われる。下線部「J.B.Kyn Yn Yu といふ中国人らしい人が原文から訳したものと、別にE.H.F.Mills といふ人の仏文から訳したといふもの」という部分はおそらく「Translated from the Chinese by J.B KYN YN YU and from the French by E.H.F.MILLS」の翻訳であると思われる。

また私の調査によれば、『当代中国短編小説家作品選』は、“Anthologie des conteurs chinois modernes”のことで、1929年に Les Éditions Rieder によって出版された。当時の中国の短編小説を九編集めた。

表紙に記載されている訳者の名はJ.B Kin Yn Yuであるが、扉と巻頭言で、訳者の名をJ.B KYN YN YUと印刷されている。些細な差異はあるが、J.B KYN YN YUという人が訳者であることは確かである。佐藤の回想の「J.B.Kyn Yn Yu」もJ.B KYN YN YUであると思われる。

図2 “Anthologie des conteurs chinois modernes” の表紙 (左) 図3目次 (右) (筆者蔵)<sup>11</sup>

<sup>10</sup> 筆者が Abebooks で購入した。Abebooks は <https://www.abebooks.com/> を参照。

<sup>11</sup> 筆者が Abebooks で購入した。Abebooks は <https://www.abebooks.com/> を参照。

“Translated from the Chinese by J.B KYN YN YU and from the French by E.H.F.MILLS”とは、J.B KYN YN YU、つまり敬隠漁によって中国語をフランス語に訳したものを、E.H.F.Millsが英語にしたと解釈できる。

佐藤の回想の「早速文求堂にかけつけて、店頭にあつた魯迅の短編集二巻を手に入れて帰り、それから英文と対照して翻したものである」という部分から、彼の「故郷」の訳文は、Millsの英訳と中国語の原典の両方を利用して訳したものであるとわかる。

佐藤は「先づ英文で一読した」と、E.H.F.Millsの英訳を読んでから、中国語の原文を買い求め、両者を対照しながら日本語に翻訳した。1932年1月1日の『中央公論』に載せているため、彼が翻訳したのは1930～1931年あたりだと思われる。

#### 4. 佐藤訳の良い点

佐藤訳を考察するには、訳文の検討が必要であろう。以下、魯迅の「故郷」を原文、敬隠漁の訳文を敬隠漁訳、Millsの訳文をMills訳、と称する。敬隠漁訳とMills訳を合わせて敬隠漁・Mills訳と呼ぶこともある。

「故郷」原文と敬隠漁訳、Mills訳、佐藤訳には違いがある。敬隠漁による「故郷」のフランス語訳に、一部の内容の脱落、原文の語順と段落順の変換がある。敬隠漁訳に基づいたMills訳も同じような問題が見られる。第3章で論じたように、佐藤春夫は敬隠漁フランス語訳を直接に参照してなかったため、以下の例文で敬隠漁訳を省略する。

本稿は佐藤訳を中心にして、彼がどのように翻訳していたかについて論じる。

##### 4.1 Mills訳の脱落の修正

敬隠漁訳とMills訳には、原文の意味が訳し出されていない部分がある。佐藤は原文と対照させて、英訳の脱落を修正した。下線部は敬隠漁・Mills訳の脱落である。

#### ア、Mills訳の説明文の削除の復活

(2) 原文：我家只有一個忙月（我們這裏給人做工的分三種：整年給一定人家做工的叫長工；按日給人做工的叫短工；自己也種地，只在過年過節以及收租時候來給一定人家做工的稱忙月）忙不過來，……

Mills訳：For the occasion we had engaged only- one servant, who cultivated his land in normal times.

佐藤訳：私の家には唯一人の忙月が居た。（一たい私の郷里では人を雇ふに三通りに別れてゐて、年給を決めて人の家で働く者を長年と称するし、日給で働く者は短工と云ひ、自分で耕作をする傍ら、自分の仕事の手すきになつて租税を納めなければならない時になつた頃

人のうちへ働きに出るものを忙月と云ふのである）あまり忙しいといふので、……

括弧の中の部分は、「忙月」という地方特有の雇用方法についての説明文である。Millsは「忙月」を“servant”と訳した。この単語だけで意味が通じるので、原文の説明の部分を省略したと思われる。このような説明文の省略は以下の（３）「狗氣殺」も同様である。「狗氣殺」を“hen-coop”と訳し、原文の説明の部分を削除した。これは敬隠漁による省略で、原文に書かれている方言を説明する必要がなくなったためと思われる。佐藤春夫はこれを復活させ、原文に忠実に翻訳している。

（３） 原文：便拿了那狗氣殺（這是我們這裏養雞的器具，木盤上面有著柵欄，內盛食料，雞可以伸進頸子去啄，狗卻不能，只能看著氣死）飛也似的跑了，……

Mills 訳：the sister-in-law Yang seized a hen-coop and went off in triumph.

佐藤訳：それにつけて狗氣殺（これは私の郷里の養雞の道具で木の盤の上に柵がとりつけてあつて、そのなかに食料を盛るのだ。雞は頸を伸してそれを啄むが、犬には出来ないののでそれを見て犬はぢれて死んでしまふといふもの）を取つて行つてしまつた。

#### イ、Mills訳のプロットの脱落の復活

（４） 原文：但我們終於談到搬家的事。我說外間的寓所已經租定了，又買了幾件家具，此外須將家裏所有的木器賣去，再去增添。母親也說好，而且行李也略已齊集，木器不便搬運的，也小半賣去了，只是收不起錢來。

Mills 訳：脱落

佐藤訳：さて私たちはたうとう家を片づける話をはじめる段になつた。私はどこかに仮住居を借りて置いてあるとか、それからさまざまな家具を買つてあるとか言つた。それから又家にある木の道具類は売ってしまったがいいといふのでまた取出して来て積み足した。母もそれがいいといふ。それから荷作りは大体すんで取揃へてあつた。木の道具類で持ち運びに不便なものは、これも大方売れてしまった。だが、これは一向にお金にはならなかつた。

（４）は主人公と母親の間にある、古家の家具の処置についての談話の内容である。敬隠漁訳がこの部分を訳さない。家具の売買の部分は閩土との記憶と楊小母さんとの談話などと比べると、小説の主要な筋ではないが、文中母親が家具を見に来る人が来たと話したこと、楊小母さんが家の不要な家具を欲しがったこと、また後半に不要な家具を閩土に選んであげたこと、合計三度出てくる。作品を肉づける重要な装置である。この部分の省略は、敬隠漁による判断だと思われる。佐藤はこの部分を原文に忠実に訳し出した。

#### ウ、Mills訳における句の脱落の復活

以上の他、句の脱落もある。佐藤はこれらの脱落を修正し、元に戻した。



- (5) 原文：我冒了嚴寒，回到相隔二千余裏，別了二十余年的故鄉去。

Mills 訳：After an absence of more than twenty years I returned to my native country.

佐藤訳：私は厳しい寒さを物ともせず、二千里の遠方から、二十年ぶりで故郷へ帰つて来た。

- (6) 原文：從蓬隙向外一望，蒼黃的天底下，遠近橫著幾個蕭索的荒村，沒有一些活氣。

Mills 訳：Through the portholes one could catch a glimpse of deserted villages shivering beneath the yellowish sky.

佐藤訳：船窓から外を覗いて見ると、どんよりとした空の下に、あちらこちらに横はっているのはみじめな見すばらしい村であつた。活気なんてものはてんであつたものではない。

- (7) 原文：一日是天氣很冷的午後，我吃過午飯，坐著喝茶，覺得外面有人進來了，便回頭去看，我看時，不由的非常出驚，慌忙站起身，迎著走去。

Mills 訳：One cold afternoon I was having tea, when suddenly I felt that someone was coming into the house.

佐藤訳：或る日大へん寒い午後であつたが、私はお昼御飯をすませて、そこに座つたままでお茶をすすつてゐる時、誰やら表から家に入つて来たやうな気がしたのでふりかへつて見て不意のことだつたので大へん驚ろき、慌てて立つて迎へに出た。

- (8) 原文：『非常難。第六個孩子也會幫忙了，卻總是吃不夠……又不太平……什麼地方都要錢，沒有定規，收成又壞。……』

Mills 訳：“It is very difficult,” he said. “The eldest boy can already help us a little, it is true ; but we have not enough to eat . . . there are always battles and robberies …The harvest is not good.”

佐藤訳：「とてもひどい。六人の子供が集つてごたごたしてゐますがとても食つてはいけませんや……それによく治つてゐないものだから……こんな地方では錢がかかつて仕様ありません。掟はなくなるし、収穫は駄目だし、……」

以上の(5)、(6)、(7)、(8)の用例の原文を見ると、魯迅の文体は幾つかの短い文節で組み合わせる長文が多いことが分かる。Mills 訳の文体は、比較的に文が短く、単文と二文節の文が多い。(5)の原文を英語に翻訳する時、Mills 訳は単文にした。この過程において、「寒さの中」(曲訳)という部分が脱落した。(6)も(5)と同じく、四文節の原文を英語の単文に翻訳する時、「活気なんか少しもなかった」(曲訳)の部分が脱落した。

(7)「昼飯を食べた後」(曲訳)の句が脱落した。「…顧みていたら、非常に驚いた。いそいで立ち上がって迎えた。」(曲訳)の部分は“suddenly”という言葉で驚きの意味を表しているが、「顧みる」と「慌てて立ち上がって迎えた」の部分が脱落した。

(8)の英訳は、原文と同じく短い文節でできた複文にしているが、その間に「掟もなく」(曲訳)という意味の句が脱落した。以上のMills 訳の脱落を、佐藤訳は原文に添って復活させた。

## エ、Mills訳の文の脱落の復活

短い句の他、Mills 訳に文の脱落も見られる。

(9) 原文：我於是日日盼望新年，新年到，閩土也就到了。好容易到了年末，……（省略）

Mills 訳：脱落

佐藤訳：私はこの日から毎日毎日新年を待ち遠しがった。新年が来れば、閩土も直ぐにやつて来る。やつとの思ひで年の暮になった。

(10) 原文：我愈加愕然了。

Mills 訳：脱落

佐藤訳：私は益々愕いたものだ。

(11) 原文：我這時很興奮，但不知道怎麼說才好，

Mills 訳：脱落

佐藤訳：私はこの時大へん興奮し、何と言つていいものかわからなかつたので

以上の文は、原文の文中で、前後を繋ぐ役割を持っている。それらを脱落したのは、敬隠漁・Mills 訳が文章の大まかな流れを通すことに重点をおいたからだと思われる。それに対して、佐藤訳は原文を対照して、以上の脱落を復活させた。

## オ、Mills 訳の順番の変更に伴う文の脱落の復活

(12) 原文：①夜間，我們又談些閑天，都是無關緊要的話；第二天早晨，他就領了水生回去了。②又過了九日，是我們啟程的日期。閩土早晨便到了，水生沒有同來，卻只帶著一個五歲的女兒管船只。③我們終日很忙碌，再沒有談天的工夫。來客也不少，有送行的，有拿東西的，有送行兼拿東西的。

Mills 訳：④ I was too busy all day to have any time to talk to him. Next morning he left with Chui-sen, his son. There was a procession of visits to the house; some came to bid us farewell, others to take away the clothes we left behind, others to do both.

佐藤訳：④夜は、私どもはちよつとした話をしたが、これは別に用もないことばかりであつた。その翌日の朝早く彼は水生をつれて帰つて行つた。又九日ほど経つた。⑤この日が私たちの出発の日取であつた。閩土は朝早くから来た。水生はつれて来ないで、その代わりに五つ位になる女の子をつれて船の番をさせてゐた。

⑤私たちは一日中大へん多忙で、話をしてゐることさへ出来なかつた。来客も少くなかつた。見送りの人もあつたし物を取りに来た人もあつた。見送りともの取とか兼ねてゐるのもあつた。

原文の①「夜、私たちは暇つぶしに話をしたが、どうでもいい話ばかりだ。」（曲訳）の時間は閩土が尋ねた日にあたる。敬隠漁・Mills 訳では原文の①、②を省略し、代わりに波線③「私達は—

日大変忙しく、もう話をするひまはなかった。」(曲訳)を意味する②を原文①の位置に置いた。原文の③は閩土が尋ねた日から九日過ぎて、引っ越しの日にあったことである<sup>12</sup>。この部分は離郷の場面で、小説の後半部にある。ここの順序の変更は、敬隠漁訳が①「暇つぶしに話をした」と③「話をするひまはなかった」を取り違えたものではなかろうか。

これに対し、佐藤訳の②、③、④は、原文の文に一々対応して、原文の順で訳し出している。

このような順番の変更に伴う文の脱落は、もう1箇所ある。

(13) 原文：②又過了九日，是我們啟程的日期。……（省略）

我們的船向前走，兩岸的青山在黃昏中，都裝成了深黛顏色，連著退向船後稍去。（省略）

②宏兒和我靠著船窗，同看外面模糊的風景，……（省略）

『回來？妳怎麼還沒有走就想回來了。』（省略）

③『可是，水生約我到他家玩去咧……』……（省略）

④我和母親也都有些惘然，於是又提起閩土來。⑤母親說，那豆腐西施的楊二嫂，自從我家收拾行李以來，本是每日必到的，前天伊在灰堆裏，掏出十多個碗碟來，議論之後，便定說是閩土埋著的，他可以在運灰的時候，壹齊搬回家裏去；楊二嫂發見了這件事，自己很以為功，便拿了那狗氣殺（這是我們這裏養雞的器具，木盤上面有著柵欄，內盛食料，雞可以伸進頸子去啄，狗卻不能，只能看著氣死），飛也似的跑了，虧伊裝著這麼高底的小腳，竟跑得這樣快。

⑥老屋離我愈遠了；故鄉的山水也都漸漸遠離了我，

Mills訳：② Next morning he left with Chui- sen, his son. There was a procession of visits to the house; some came to bid us farewell, others to take away the clothes we left behind, others to do both.

③ So it was that the Beauty of the savoury beans, who had never ceased prowling round the house since we began the move - so my mother told me afterwards - discovered in the pile of ashes ten or more bowls and dishes. " Yes, Jun-tu must have hidden them there, " she declared, biting her little finger, " he meant to pick them up in his basket when he came away to take the ashes. I'm sure of it..." So important a discovery deserved its reward. And without waiting to be asked, the sister-in-law

<sup>12</sup> 井上紅梅訳「故郷」(1932)では、「九日目にわたしどもの出発の日が来た。閩土は朝早くから出て来た。」と訳している。前半の翻訳と合わせると、井上は閩土が尋ねた日は主人公が故郷に着いてから7日目で、一晚過ぎて、8日目に息子を連れて帰る。9日目に再び来訪したと考えて訳しているのではなかろうか。魯迅は1919年の日記で、1919年12月の帰郷のことを記載している。「故郷」のモデルと考えられる。これによると、12月4日に紹興に着いてから、21日目の24日に「舟二艘で母と三弟とその家族と荷物を載せ、紹興に向かう」(曲訳)と記載している。井上の故郷に着いてから数える「九日目」の訳は、井上が「故郷」原文の経過日数を計算したために生じたものではなかろうか。

Yang seized a hen-coop and went off in triumph.

① On the evening on which we went on board the boat, only the empty shell of our old house was left; big or little, tough or fine, all our old things had been swept away by the flood of visitors.

Meantime our boat moved on in the dusk. The mountains on either bank, blue in the mist, retreated steadily towards our native country.

② Little Hong, who was looking out of the porthole with me, …… (省略)

“ Uncle, when shall we be able to come back? ”

“ Come back ? Why are you thinking of coming back before you have gone away ? ”

③ “ But Chui-sen asked me to go and play with him.”

And gazing at everything with big black eyes, he stood deep in thought. …… (省略)

佐藤訳：① 又九日ほど経った。この日が私たちの出発の日取であつた。…… (省略)

私どもの船は進んで行つた。両岸の山々は夕方の薄明のなかにあつて青黒く、つぎつぎに現れ出て来ては船の後の方へ消えて行つてしまふのであつた。(省略)

② 宏児は私と一緒に船の窓によりかかつて外のほんやりとした風景を眺めてゐたが、…… (省略)

「帰つて来るつて？ お前まだ行きもしないうちから何だつて帰つて来ることなど考へてゐるの」(省略)

③ 「だつて、水生にうちへ来て遊んでくれと言われてゐるのですもの」…… (省略)

④ 母と私とはそれに氣をとられて、また閩土が思ひ出されて来た。⑤ 母が話すには、あの豆腐屋小町の楊小母さんは、うちで荷物拵へをはじめて以来、毎日必ず来ぬ日とは無かつたものだが、先日あの灰を積んであつたところから碗や碟などを十あまりも出して来たものだ。言ひ争つてみた後に、これは閩土が埋めて置いたものに相違ない、彼は灰を搬ぶ時にそれも一緒に家へ持つて行くつもりだつたに違ひないと言つて、楊小母さんじゃこれを見つけ出したのは自分の大へんな手柄だといふので、それにつけて狗氣殺（これは私の郷里の養雞の道具で木の盤の上に柵がとりつけてあつて、そのなかに食料を盛るのだ。雞は頸を伸してそれを啄むが、犬には出来ないのをそれを見て犬はぢれて死んでしまふといふもの）を取つて行つてしまつた。飛ぶやうに逃げて行つてしまつたが、何しろ踵の高い小さな靴を穿いてゐるものだから急ぐと危く転ばんばかりになつて逃げて行つたよ。

原文の叙述順序は①引越しの日の出来事——②「私」と宏児が風景を眺めている——③宏児は水生のことを懐かしく思う——④母親と「私」の閩土についての談話——⑤母親がいう楊小母さんの話——⑥「私」は離郷の船で色々を考える、である。敬隠漁・Mills訳の叙述順序は①引越しの

の日の出来事——⑥' 母親がいう楊小母さんの話——⑦' 「私」は離郷の船で色々と考える——⑧' 「私」と宏児が風景を眺めている——⑨' 宏児は水生のことを懐かしく思う、になっている。

原文の⑥、⑨の主人公と宏児の間にある水生についての話は、④母親と「私」が閩土についての談話——「母親も私も氣をとられ、そして話がまた閩土のことに戻った。」(原文下線部 曲訳)を導く働きを持っている。

敬隠漁・Mills訳は⑥' 楊小母さんが「狗氣殺」を持って逃げる部分と⑦' 「私」は離郷の船で色々と考える部分を⑧'、⑨' 主人公と宏児の話の前に移している。④を訳していない。④の省略と⑥'、⑦' 叙述順序の入れ替えによって、敬隠漁・Mills訳と原文の間に時間順序と表現形式が違ってくる。原文の叙述順序及び表現手法に不一致を生じさせた。佐藤訳は、上述の不一致を修正し、文の叙述順序を原文のままに翻訳している。

以上の12箇所の脱落は、敬隠漁・Mills訳が原文を訳出しなかったところである。Mills訳は敬隠漁訳の脱落をそのまま受け継いでいるので、翻訳当時、中国語の原文を参考しなかったと思われる。

佐藤訳は、中国語の原文と英訳を対照して訳しているため、英訳の脱落した部分を修正することができた。「故郷」原文に基づいていて訳し出している点は、評価できよう。

## 4.2 Mills訳誤訳の修正

敬隠漁・Mills訳には原文の意味を的確に伝達していない箇所もある。佐藤訳は、英訳の誤訳を修正し、より正確に翻訳している。

(14) 原文：他便對父親說，可以叫他的兒子閩土來管祭器的。

Mills訳：I suggested to my father that he might get this man's son, Jun-tu, to watch over our things.

佐藤訳：この使用人が私の父に向つて自分の子の閩土を呼んで祭器の番をさせてはと申し出た。

「他便對父親說」を日本語に翻訳すると、「彼（その使用人）が私の父に言う」（曲訳）となるが、敬隠漁・Mills訳では、「彼」ではなく「私」が父に提案したとなる。佐藤訳では「この使用人が私の父に向つて」と正しく訳している。

## 5. 佐藤訳の悪い点と良い点と両方がある例

### 5.1 Mills訳を修正したもの、依然問題が残っている点

4.1で挙げているように、敬隠漁・Mills訳の脱落を、佐藤春夫によって12箇所修正した。だが、以上の12箇所の他、Mills訳の脱落を完全に復活できていない例も2箇所ある。

(15) 原文：我躺著，聽船底潺潺的水聲，知道我在走我的路。我想：我竟與閩土隔絕到這地步了，……（省略）

Mills 訳: In my bunk I could hear the lapping of the water beneath the boat. My thoughts, at hesitating, settled now on the past and now on the future. The picture of Jun-tu rose before them a moment, and then disappeared. Why did so deep a gulf separate us?

佐藤訳: 私は身を横へて船底にじゃぶじゃぶと当る水音を聴きながら、私は自分の生涯を、また私と閩土とのこんなにかき隔てさせてしまったものを考へ、…… (省略)

(15) 敬隠漁・Mills 訳は“settled now on the past and now on the future”「過去に基づく現在と未来における現在について思考している」(曲訳)を原文の「自分は自分の道を歩んでいることを悟る」(曲訳)の位置に置き換えている。翻訳者の理解で「知道我在走我的路」を意識している。佐藤訳も「私は自分の生涯を……考へ」と英訳に近い翻訳をした。

動詞「知道」は「①知る。②知らせる、告げる。③事物の規律を知る。」(『中国語大辞典』角川書店)の意味である。①「知る」の意味は隋唐五代「或使病人未終之時、眼耳見聞、知道眷屬將舍宅、寶貝等為其自身塑畫地藏菩薩形像。」『地藏本願』に出ている。宋の詞と明の白話小説においても、「知る」という意味で使われている。「一枝寄贈、教渠知道春復。」(「念奴嬌」『全宋詞』程大昌)「今早回庵、方才知道。」(『二刻拍案驚奇』)<sup>13</sup>

「知道」の「知る」という意味は古来使われている。次の(16)の中の「知道」の「知る」という意味を、佐藤は正しく翻訳している。

魯迅の「知道我在走我的路」は「(我)(主語) + 知道(述語) + 我(従属節の主語) + 在(持続) + 走(従属節の述語) + 我的路(目的語)」という構成である。

現代語の文法で組み合わせたこの表現は、漢文として読み取るのは難しくないと思われる。だが、「路」と「知道」を抽象的に訳すのがいいか、具体的に訳すのがいいか、ということは訳者による選択であろう。佐藤訳は脱落・誤りとはっきり言えないかもしれない。しかし、後述8で述べるように、1935年再翻訳した時に佐藤春夫はこの部分を修正した。原文に近い訳し方「私は自分の行手を行きつゝあることを感じた。」に直した。この修正の行為が、佐藤春夫がこの部分の翻訳を反省したからだと考える。或いは増田渉に「改めるべき箇所を指摘」(佐藤春夫「あとがき」『魯迅選集』岩波書店 1935)されたからだと考える。

(16) 原文: 這我知道, 在海邊種地的人, 終日吹著海風, 大抵是這樣的。

Mills 訳: 脱落

佐藤訳: これは海辺の人は毎日潮風に吹かれて、大抵こんな風になるものだと自分も知つてゐる。

(16) で、敬隠漁・Mills 訳は「海辺で耕作する人」と「大抵こんな風になるものだと自分も知つてゐる」に相当する文章がない。佐藤訳「海辺の人は毎日潮風に吹かれて」は Mills 訳からではなく、

<sup>13</sup> 教育部語言文字応用研究所計算語言学研究室: 語料庫在線—古代漢語語料庫  
http://corpus.zhonghuayuwen.org/index.aspx

自ら原文の意味を訳し出したものであると思われる。この文はMills訳を訂正したが、「耕作する」の部分で脱落した。「種地」の「種」は植えるの意味が古くからあり、『古詩為焦仲卿妻作』の中に「東西植松柏、南北種梧桐」（用例と意味は『大漢和辞典』修訂版から）とあるように、漢の楽府詩に使われている。<sup>14</sup> 中国語の翻訳をたくさんした佐藤はこの漢字の意味を知っている可能性が高い。「海辺の人」で「海辺で耕作する人」の意味が表せると思ったので、脱落したと思われる。

(17) 原文：第六個孩子也會幫忙了，……（省略）……

Mills訳：The eldest boy can already help us a little, ……（省略）……

佐藤訳：六人の子供が集つてごたごたしてゐますがとても食つてはいけませんや……（省略）……

「第六個孩子」は「六番目の子」の意味であるが、敬隠漁訳とMills訳では「長男」に誤訳している。佐藤訳の「六人の子供が集つて」も誤訳になるが、Mills訳からではなく、彼自身の理解で訳したことがわかる。「故郷」の文中で分かるが、「水生」が主人公の甥「宏児」と同じぐらいの年なら、7、8歳の筈だった。五番目である「水生」より年下の「五歳の女の子」がその六番目に当たると考えられる。船の番もできるというところも、「手助けをしてくれる」点と一致している。佐藤訳は漢字「六」と「孩子」（子供『中国語大辞典』）の意味を訳し出したが、「第〜個」という順番を表す用法を正しく翻訳していない。「六人の子供が集つて」という誤訳は、佐藤春夫が中国語の文法ではなく、原文を漢文で翻訳しているのがわかる。

## 5.2 佐藤訳の誤訳

佐藤訳には、尚、正確でない訳が存在している。

(18) 原文：木器不便搬運的，也小半賣去了，只是收不起錢來。

Mills訳：脱落

佐藤訳：木の道具類で持ち運びに不便なものは、これも大方売れてしまつた。だが、これは一向にはお金にはならなかつた。

(18)「收不起錢來」の「收」は動詞で、「収集する」の意味である。「起・起来」は「動詞の後に用い、動作の完成、あるいは目的達成を表す」（『中国語大辞典』角川書店）が、動詞「收」の後では「趋向补语」（方向補語、曲注）の働きをする。中国語の補語は、「動詞や形容詞の後にあって、補充的に説明している成分」である（香坂順一 1989）。「起来」は劉月華（1998）によれば「収縮、集合を表す動詞の後ろについて、結果状態を表す。例えば：集中、团结、聚、组织、召集、儲蓄、积累、收（钱）、组装、串、摺、累、堆、扫等。」（曲訳）

「收不起錢來」は「(N施) + V + 起 + N受 + 来」（劉月華 1998）の構造に「不」を入れることによって、不可能式を構成する。つまり、「收（述語） + 不（不可能） + 起（方向補語） + 錢（目的語）」

<sup>14</sup> 『古詩為焦仲卿妻作』は漢か、六朝に作られたとされている（『中国大書典』初版による）。

+ 來 (方向補語)」という構文である。

「收不起錢來」を直訳すると、「お金を回収することができない」(曲訳) という意味である。前文と繋げると、「家具を大体売れたが、そのお金はまだ貰っていない」の意味である。この句は敬隠漁・Mills 訳でも脱落しているので、佐藤が原文から訳したということがわかる。しかし、「お金にはならなかった」は、「家具があまりいい値段にならなかった」(曲訳) ことを意味し、原文と食い違っている。漢文の文法では、可能を表す助動詞「可・能」の否定文の目的語が動詞の後に或いは前に置くことが多い。「お金を収集することができない」という意味は、漢文で「銭 (目的語) + 不 (否定副詞) + 能/可 (可能助動詞) + 收 (述語) + 也 (助詞)」<sup>15</sup>、或いは「不 (否定副詞) + 能/可 (可能助動詞) + 收 (述語) + 銭 (目的語) + 也 (助詞)」になる。可能を表す助動詞「可・能」が明示されていない「收不起錢來」を誤訳するのは、佐藤が現代中国語の文法に不慣れだったからと考えられる。

- (19) 原文：下午，他揀好了幾件東西：兩條長桌，四個椅子，一副香爐和燭臺，一桿擡秤。他又要所有的草灰（我們這裏煮飯是燒稻草的，那灰，可以做沙地的肥料），待我們啓程的時候，他用船來載去。

Mills 訳：In the evening, he chose a few pieces of furniture and household utensils: two long tables, four chairs, a weighing machine, a pair of censers and of candlesticks. He asked me to keep for him the ashes from the grates (ashes of rice straw which are used as manure) saying that he would call for them with his boat the day we left.

佐藤訳：昼すぎになつて、彼は気に入つたものを幾つか折り出した、長いテーブルが二つ、椅子を四つ、一そろひの香炉と燭台と秤を一桿、彼は又藁灰を欲しいといふのであつた。私たちの出発する時が来たら、彼は自分の船をまはして来て私たちを載せて行つてくれると云つた。

(19) 「他用船來載去」は「彼はそれらを載せて舟でいく」(曲訳) という意味である。「それら」は前文の「家具」と「藁」を指している。後文で「閩土」が私たちの旅立つ日に、自分の船で家具と草灰を運んで帰ることがそれを証明している。佐藤訳は「彼は自分の船をまはして来て私たちを載せて行つてくれると云つた」と訳し、家具等ではなく、「私たち」を乗せて行つてくれる意味になっている。後文にも出ているが、私たちは「閩土」の船に乗らず、他の船で旅立っている。「閩土」が自分の船で「家具」と「藁」を運ぶことがMills 訳で見られる。“them”は前文の“a few pieces of furniture and household utensils”と“the ashes”を指すと思われる。佐藤の誤訳は、自分の理解の間違いから生じたものであると思われる。

<sup>15</sup> 「銭不能/可收也」と「不能/可收銭也」の表現は曲が唐子恒 (2000) 第三章第三節と彭国鈞 (2008) 第四章第四節を参照した作例である。



## 6. 楊小母さんが手袋をくすねる場面の脱落

敬隠漁・Mills 訳や訳者不明訳で脱落していない文が佐藤訳において 1 箇所脱落している。

- (20) 原文：圓規一面憤憤的回轉身，一面絮絮的說，慢慢向外走，順便將我母親的一副手套塞在褲腰裏，出去了。

Mills 訳：And the compasses turned her back on me indignantly, picked up my mother's gloves as she passed, crammed them into her trousers' pocket, and went out, muttering.

佐藤訳：コンパスはぷりぷりしながらくるとうしろ向きになつて、くどくどとしやべりつづけながら、のそのそと外へ出て行つた。

「順便將我母親的一副手套塞在褲腰裏」は、「ついでに母親の手袋を自分のズボンのウエストにねじ込んで」（曲訳）の意味である。「楊小母さん」が文句を言いながら外へ出て行くとき、「母」の手袋を自分のズボンのウエストにねじ込んだ。この描写は敬隠漁・Mills 訳と訳者不明訳で正しく訳しているが、佐藤訳で、手袋をくすねる場面がない。手袋をくすねる行為は楊小母さんの素行が手癖が悪く、下品な性格を示すことにとても重要な一場面である。しかし、楊小母さんの人物造形について、佐藤訳は全体的に、力を入れて描写している<sup>16</sup>。どうしてこの箇所を脱落したのだろうか。

手袋をくすねる場面が佐藤訳にない理由は、以下のようなことが考えられる。

まずは単純に佐藤春夫の見落としと考えられる。この文は Mills 訳、訳者不明訳にも脱落していないし、中国語の文法としても難しい構成ではなく、文としても見落としやすい長さでもない。単純に佐藤の見落としとは考え難いではなかろうか。

次に、編集者側による編集があったかもしれない。『中央公論』の編集者に、手癖の悪い中国人という描写を嫌がった者がいたかもしれない。しかし一方で、佐藤春夫の文章を勝手に削ったのも考え難い。

第三に、佐藤春夫による意図的な削除ということも考えられる。この箇所は理由なく手袋をくすねており、楊小母さんの人物造形としては色々と理由つけて物をもらおうとする性格付けと一致していないので佐藤本人が削除して、人物造形に統一性をもたせようとしたのかもしれない。

第四に、佐藤春夫による創作的な削除ということも考えられる。佐藤春夫は楊小母さんが使う人称代名詞、尊敬表現、受給表現などいろいろと工夫して、楊小母さんの人物造形を原文以上に鮮明に表現している。単なる翻訳から、更に一步翻案へ踏み出しているという意識があるのではないかと思われる。佐藤訳の「故郷」は1940年、新潮社の『支那文学選』（新日本少年少女文庫）に収録

<sup>16</sup> 筆者は2018年9月2日第68回西日本国語国文学会で「佐藤春夫の魯迅著「故郷」の翻訳文体についての考察」というタイトルでの口頭発表をした。楊小母さんの人物造形について考察を行い、佐藤春夫は人称、尊敬表現、受給表現の手段を利用して、楊小母さんの性格を鮮明に描いているという結論を述べた。

される時、楊小母さんに関する部分、閩土が藁に物を埋める疑いがある部分、文末の理屈っぽく思われやすい「希望」と「路」の部分削除した。佐藤訳「故郷」の、手袋をくすねるという行為はあまり少年向けではないので、削除した可能性もある。

以上、四点の可能性を掲げたが、今の段階ではどれと決定できないが、この手袋の箇所削除は佐藤の翻訳、さらには翻案を考えるうえで今後重要なポイントとなるであろう。

## 7. 訳者不明訳と佐藤訳の参照関係

3では、佐藤春夫の回想による記載を考察し、彼が中国語の原文とE.H.F.MILLSの英訳を対照しながら翻訳をしたと結論した。訳者不明訳は1927年『大調和』第1巻第7号の313～332頁にわたっているが、すぐ次の333頁からアナトール・フランス著、佐藤春夫訳の「人間悲劇」が掲載されている。訳者不明訳の「故郷」の最後の頁と佐藤の「人間悲劇」の最初の頁が同じ印刷面に収められている。当時の佐藤が、自分の翻訳が載っている雑誌を手にして、前後の文章を目を通す可能性も十分ある。そこで佐藤訳の脱落と誤訳を訳者不明訳と比べ、参照関係があるか否かを考えてみる。訳者不明訳と佐藤訳の内容が一致しているところは以下のとおりである。両者ともに正確な訳ではない。前述のように、「收不起錢來」の構造は漢文で読み取るのが難しい。訳者不明訳も佐藤と同じように、可能助動詞の明示がないという理由で誤訳した可能性が高い。

### (18) 再掲、「收不起錢來」

訳者不明訳：木製家具は運搬が不便なので、半分ばかり賣つてしつた、だがあまり錢にはならない、といひ添へた。

佐藤訳：木の道具類で持ち運びに不便なものは、これも大方売れてしまった。だが、これは一向にはお金にはならなかつた。

訳者不明訳と佐藤訳の内容が一致していないところは以下である。

### (16) 再掲、「在海邊種地的人」

訳者不明訳：これは海邊で田圃仕事をしてゐる人は一日海風にふかれてゐるので大抵こんなになるのだ。

佐藤訳：これは海辺の人は毎日潮風に吹かれて、大抵こんな風になるものだと自分も知つてゐる。

### (15) 再掲、「知道我在走我的路」

訳者不明訳：自分は脚をのばして仰向にねた、船底のぴたぴたといふ音が聞える。はゝあ、おれはおれの路を走つてゐるのだといふことがわかる。かう思ふ、おれは閩土と離れ離れになつてこんなところまで来た、……（省略）

佐藤訳：私は身を横へて船底にじゃぶじゃぶと当る水音を聴きながら、私は自分の生涯を、また私と閩土とのこんなにかへ隔てさせてしまつたものを考へ、……（省略）

### (20) 再掲、手袋を盗む描写

訳者不明訳：圓規美人は、腹立たしさうに身體を回しながら、何やらぶつぶつ呟やき呟やき、そろそろと外の方に出て行つた、出かけに母の手袋がそこいらにあつたのをすつととつて腰巻の何處かに押し込んだ。

佐藤訳：コンパスはぷりぷりしながらくるりとうしろ向きになつて、くどくどとしやべりつづけながら、のそのそと外へ出て行つた。

(17) 再掲、「第六個孩子」

訳者不明訳：六番目の餓鬼がよく手傳つてくれます、……（省略）……

佐藤訳：六人の子供が集つてごたごたしてゐますがとても食つてはいけませんや……（省略）…  
…

(19) 再掲、「他用船來載去」

訳者不明訳：私たちがこゝを立つ頃を見計らつて、船でもつて行かうといふのである。

佐藤訳：私たちの出発する時が来たら、彼は自分の船をまはして来て私たちを載せて行つてくれると云つた。

以上の考察から見ると、佐藤訳の脱落と誤訳は、訳者不明訳と一致しているところがただ「收不起錢來」の1箇所だけである。その他の佐藤訳の脱落と誤訳が訳者不明訳と不一致である。(16)、(15)、(20)、(17)、(19)は訳者不明訳のほうが正しい。佐藤が翻訳する時、訳者不明訳を参照しながら翻訳した可能性はないわけではないが、佐藤が自分なりに工夫して翻訳をしていることがわかる。

## 8. 1935年岩波文庫『魯迅選集』における修正

佐藤春夫は、漢文や白話文を読解することができたと思われる。だが、現代文の文法は漢文や白話文と違う点がある。それを日本語に翻訳するとき、佐藤はMills訳を中国語の意味を読み取る補助として使っている。

1932年『中央公論』に掲載した「故郷」は脱落と誤訳が存在している。その中のミスは、英訳がないところと英訳の補助があるところに二種類に分類できる。

英訳がないところは以下である：(16)「在海邊種地的人」、(18)「收不起錢來」が英訳の脱落である。(17)「第六個孩子」は英訳の誤訳である。

英訳の補助があるところは以下である。(20)手袋を盗む場面の脱落、(19)「他用船來載去」のところは、Mills訳で正しく翻訳されている。(15)「知道我在走我的路」(英訳も原文と表現が違う。)

英訳がないところと英訳の補助があるところに関わらず、佐藤はMills訳と違う翻訳をしている。佐藤は英訳に完全に依存せず、自分なりに翻訳をしているのがわかる。(19)「他用船來載去」の誤訳は、彼のミスでありながら、自分の理解で努力して翻訳しようとしている証拠になる。

佐藤訳の「故郷」は1932年の『中央公論』で発表した後に、増田渉に中央公論版の「改めるべき

箇所を指摘」(佐藤春夫「あとがき」『魯迅選集』岩波書店 1935) してもらった。1935年岩波文庫の『魯迅選集』に収録された際、佐藤は1932年版の脱落と誤訳の部分を修正した。

(15)「知道我在走我的路」は「私は自分の行手を行きつゝあることを感じた」となっている。(16)「在海邊種地的人」は「海邊で耕作する人」とした。(17)「第六個孩子」を「六番目の子供までが手助けをしてくれますが」とした。(18)「收不起錢來」を「だがまだお金をもらはないと云つて」とした。(19)「他用船來載去」を「彼は船をまはして来て積んで帰ると云つた」と訂正している。(20)の手袋を盗む場面も、「そのついでに私の母の手袋をパンツの中へすね込んで、出て行つたのである」(佐藤春夫訳「故郷」『魯迅選集』岩波書店 1935) とした。

再出版の際に翻訳を訂正することから、佐藤春夫が「故郷」翻訳に対する熱意が伺える。

## 9. おわりに

本稿は佐藤春夫の訳文を原文、敬隠漁訳、Mills訳、訳者不明訳と比較分析した。その結果から、以下の結論に達した。①1927年の『大調和』の「故郷」の訳文は作家本人、或いは中国人によるものではない。中国人ならしないような誤りが存在していることから、日本人による翻訳であると思われる。②Mills訳は敬隠漁のフランス語訳を参照し、中国語原文を見ていないと思われる。③佐藤訳は、中国語の原文をMills訳と対照しながら訳したものである。④佐藤訳は、1927年の訳者不明訳を参照しながら翻訳する可能性もあるが、自分なりに翻訳をしていると思われる。⑤佐藤訳には脱落、誤訳があるが、佐藤なりに工夫して原文を訳している。⑥楊小母さんが手袋をくすねる場面を削除したのは、佐藤の翻訳態度を考えるうえでの重要な点である。原文に忠実な翻訳から翻案へ一歩踏み出している姿勢とも考えうる。⑦1935年の『魯迅選集』を編纂する時、『中央公論』の「故郷」の誤訳と脱落を訂正した。佐藤の「故郷」翻訳にける情熱が窺える。

中国語原文を英訳、或いはドイツ語訳の両方を利用して翻訳をすることは、佐藤春夫の生涯ではよくあることである。1923年に出版された『支那短編集玉簪花』という翻訳集は、中国古典の作品の翻訳十一篇を集めたものである。佐藤春夫は『支那短編集玉簪花』「自序」で自分の翻訳方法を次のように紹介する。

私がそんな風に話の刈込みをする時や、或は訳に困るような時に参考にしたものは、Herbert Giles *Strange Stories from a Chinese Studio*, Leo Greiner *Chinesische Abende*, Martin Burder *Chinesische Geister und Liebes Geschichten*. である。独逸文の書物は、舍弟秋雄が私のために読んでくれた。ヨオロッパの表現が支那の気持を我々に新鮮なものに感じさせる場合には、私は彼等に従つた場合もないではない。ただ私は骨惜みをして字句の洗練を十分にしなかつた點があることを白状しなければならない。

牛山百合子（1968）の研究では『玉簪花』の十一篇の作品の中国語原典、英訳（或いはドイツ語訳）の対応関係を示している。但し、佐藤春夫が英訳（ドイツ語訳）と中国原典をどのように使用して翻訳しているかを具体的に論じていない。

本稿は佐藤訳「故郷」を用いて、佐藤春夫の翻訳の方法を具体的に明らかにした。各訳文を比較することによって、彼が「故郷」の翻訳において、中国語原文を中心に、英訳を補助手段として使い、翻訳していることを見出した。また、英訳の修正と自分の翻訳のミスを訂正することから、佐藤春夫が翻訳に対する熱心な態度が窺えた。佐藤春夫の翻訳活動、また翻案に進む姿勢をより明瞭に示すことができたと考える。

### <参考文献>

- 魯迅（1919）「魯迅日記」（引用は『魯迅全集』巻15、人民文学出版社、2005に拠る）
- 魯迅（1921）「故郷」（『新青年』第9巻第1号。『新青年』は『新青年』影印版 第11冊、株式会社大安1962に拠る）
- 佐藤春夫（1923）「自序」（『支那短編集玉簪花』所収 新潮社）
- 訳者不明訳（1927）「故郷」（『大調和』第1巻第7号、亜細亜文化研究号、文芸春秋社。（『大調和』は『国立国会図書館所蔵 昭和前期文芸・同人誌集成』複製版（アイアールディー企画、紀伊国屋書店、1998）に採録されたものに拠る。））
- 武者小路実篤（1927）「発刊の辞」（『大調和』第1巻第1号、創刊号、文芸春秋社）
- 魯迅（1927）「魯迅日記」（引用は『魯迅全集』巻16、人民文学出版社、2005に拠る）
- J.B.Kyn Yn Yu（1929）‘*LE PAYS NATAL*’（“*LES PROSATURS ÉTRANGERS MODERNES Anthologie des conteurs chinois modernes*”：LES ÉDITIONS RIEDER – PARIS MGMXXIXに拠る）
- E.H.F. Mills（1930）‘The Native country’（“*The Tragedy of Ah Qui and Other Modern Chinese Stories*”：George Routledge & Sons,Ltd. Broadwaay House, Carter Lane, E.C.4に拠る）
- 佐藤春夫（1932）「故郷」（『中央公論』第528号、中央公論社、に拠る）
- 井上紅梅（1932）「故郷」（『魯迅全集』全1巻、改造社、に拠る）
- 佐藤春夫（1935）「故郷」（『魯迅選集』岩波文庫、岩波書店、に拠る）
- 佐藤春夫（1935）「あとがき」（『魯迅選集』掲載、岩波書店）
- 佐藤春夫（1940）「ふるさと」（『支那文学選』新日本少年少女文庫 新潮社、に拠る）
- 佐藤春夫（1956）「魯迅の『故郷』と『孤独者』を訳したころ」（初出は『魯迅選集 別巻 魯迅案内』岩波書店1956。引用は『定本 佐藤春夫全集』第25巻、2000初版、臨川書店に拠る）
- 牛山百合子（1968）「校注」（『佐藤春夫全集』第九巻、講談社）
- 丸山昇（1986）「日本における魯迅」（『近代文学における中国と日本』所収、汲古書院）

香坂順一 (1989) (『文法からの中国語入門』 光生館)

劉月華 (1998) 「貳拾貳 起来」 (『趋向补语通释』 北京語言文化大学出版社)

須田千里 (1998) 「解題」 (『定本 佐藤春夫全集』 第28巻、1998初版、臨川書店)

松村友視 (1999) 「解題」 (『定本 佐藤春夫全集』 第29巻、1999初版、臨川書店)

唐子恒 (2000) (『文言語法結構通論』 山東大学出版社)

「故郷注釈」 (2005) (『魯迅全集』 巻1、人民文学出版社)

「人物注釈」 (2005) (『魯迅全集』 巻17、人民文学出版社)

王家平 (2005) 「20世紀前期欧美的魯迅翻譯和研究」 (『魯迅研究月刊』 04号、北京魯迅博物館)

彭国鈞 (2008) 『簡明實用文言語法』 雲南美術出版社

財団法人佐藤春夫記念会 (2011) (『佐藤春夫記念館所蔵佐藤家旧蔵洋書目録』 新宮市立佐藤春夫記念館)

笹原宏之 (2017) 『謎の漢字 由来と変遷を調べてみれば』 (中公新書)

#### <使用辞書>

『西洋文学事典』 ちくま学芸文庫 (2012)・『アポロ仏和辞典』 角川書店 (1991)・『日本国語大辞典 第二版』 小学館 (2001)・『中国語辞典』 白水社 (2002)・『中国語大辞典』 大東文化大学中国語大辞典編纂室・編角川書店 (1994)・『近代漢語大詞典』 中華書局 (2008)・『大漢和辞典』 修定版 大修館書店 (1985)・『役割語小辞典』 研究社 (2014)・『中国大書典』 中国書店 (1994初版)・『ジーニアス英和辞典 第4版』 大修館書店 (2013)

#### <データベース>

教育部語言文字応用研究所計算語言学研究室：語料庫在線—古代漢語語料庫 <http://corpus.zhonghuayuwen.org/index.aspx>

付記：

本稿は第68回西日本国語国文学会 (2018年9月2日、別府大学32号館400番教室) において「佐藤春夫の魯迅著「故郷」の翻訳文体についての考察」というタイトルで口頭発表したものの前半部分に改変を加えたものである。席上ご意見をくださった先生方に感謝の意を申し上げる。

